

## 香川

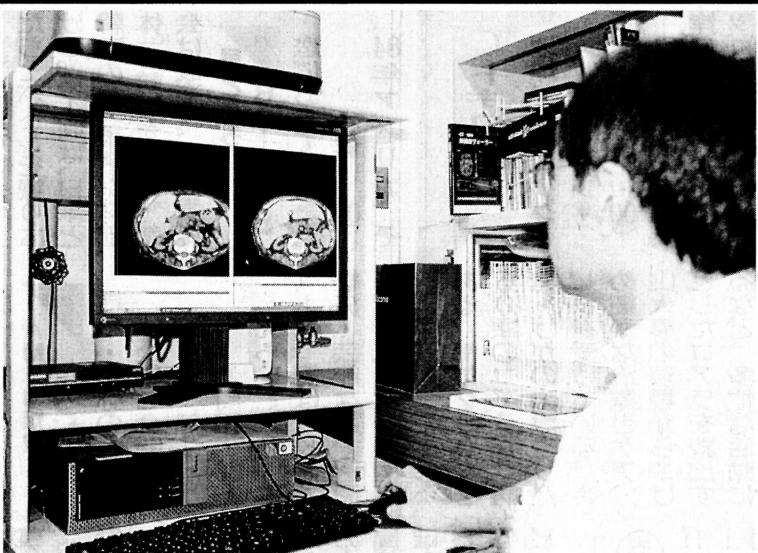
## I T 医療の普及へ

## 広がる遠隔医療

香川の挑戦

7月下旬のある日、病室で、「読影依頼が病床数251床、19診療科、1件」の表示があった。

この日診たのは、丸亀国立病院機構普通寺病院内で定期検査を受けた女性人工透析患者のCT(コンピュータ断層撮影)画像147枚。須井医師は、体を輪切りにした連続画像を念入りに見た後、昨年11月に送られてきた画像と比較するとともに、読影レポートを参照。がんなどの異状が無いことを確認し、報告書を作成・返送した。その間の診察にかかった



K-MIXを使ってCT画像を撮影する須井医師

普通寺市仙遊町2の国立病院機構普通寺病院で

## K-MIX 大きな利点と残る課題

のはわずか約15分だった。

現在、普通寺病院には、普通寺市や丸亀市など4市町で契約を結んでいる開業医を中心とした6医療機関からCTやMRI(磁気共鳴画像化装置)画像の読影依頼が多いと1日30件以上来る。

須井医師はK-MIXを使った読影で、大腸がんや肺がんを見つけたこともある。患者は、近くの病院でCTを撮っても、大病院の放射線科専門医にすぐ読影してもら

える。開業医など小規模な医療機関に常勤の放射線科専門医がいるのはまれだが、契約している6医療機関なら、普通寺病院で受診するのと同じ

で、医療格差は大きく埋まる。患者にも、近所の医療機関で診てもらう利点は大きい。

医師にとっても、外科などに患者が転院した際、紹介状に「画像はK-MIXで診てもらっている」と書かれていることで、すぐに他科と連携が取れる。普通寺病院で手術し、自宅近くの病院で経過を見ている患者も多く、がんの再発などの確認ができ、「地域連携しやすい」という。

さらに、CTやMRI画像を診察医と須井医師が二重にチェックすることになり、精度の向上も

期待できるなど、K-MIXの利点は数多い。

だが、すべてがバラ色ではない。寄せられる依頼は「できる限りその日のうちに読影します」(須井医師)との方針で、放射線科の医師3人が、空いた時間に読影する。だが、夜に会議などがあれば、「すぐに診てほしい」と依頼元の医師から電話があっても、午後10時を過ぎることもある。

土曜日に診療をしている開業医が多く、休日も読影せざるを得ないものも

悩んだ。さらに、現行の制度では、診療報酬は読影を依頼した側にのみ支払われる。須井医師は、「医師の努力に支えられているのが実情。国が、こうした読影の報酬体系を決めてほしい。システムを普及させるには欠かせないことだ」と強調

した。普通寺病院では、約2年前から依頼する病院から一定額の支払いを受けられるよう契約を結んでいる。

◇ ◇ ◇

国のIT戦略本部は、昨年5月、「新たな情報通信技術戦略」を発表した。医療分野では、全国どこでも自らの医療・健康情報を電子的管理・活用できる「どこでもMY病院」構想、ITを活用した継ぎ目の無い地域連携医療の実現などを掲げた。だが、県内では、CTやMRIの画像データの医療機関同士のやり取りなどが可能なK-MIXの運用が03年6月に始まり、課題も明らかにしつつある。更に、医療機関と調剤薬局を結ぶ「電子処方箋システム」の研究開発、「電子カルテ機能統合型TV会議システム」(ドクターコム)の研究なども進む。香川のITを使った遠隔医療の現場取材した。

【吉田卓矢】



K-MIX 県医師会の到達状況などを共有が運営する医療連携システム。カルパス(診療計画書)機能などを備える。県内医療機関は月額6500円(クリティカルパスも使用する場合は8000円)、県外医療機関は同1万円(同1万2000円)の費用を払えば利用可能で、現在、県内外の約108医療機関が参加する。

さらに、CTやMRI画像を診察医と須井医師が二重にチェックすることになり、精度の向上も